

# 不登校からの立ち直り

近年は、少子化、情報化、価値観の多様化など、子どもたちを取り巻く状況にもさまざまな変化が生じています。こうした中、全国の不登校児童生徒数は減少傾向にあるものの12万人を上回る状況にあり、不登校問題は大きな社会問題となっ

## 信雄君との心のキャッチボール

筆者は初任のころ、中学3年生の信雄君(仮名)を担当しました。信雄君は中1の時に転入し、その後不登校状況が続いていました。1学期始業式の日、学年主任の先生と2人で彼の家を訪問しました。茶の間で母さんと話をしていると、2階から「ドンドン」と音が聞こえます。日ごろから自分の気にいらぬことがあると、必ずまや障子を破ったり、先生が来ると床や壁をたたき、物音を立てて、強い反発を繰り返すことを話されました。

君に会うことができ、放課後に家庭訪問をすることを伝え、1か月ほどは彼の好きな将棋やキャッチボールをして一緒に遊びました。信雄君との信頼関係が深まったころから、漢字や計算の勉強も少しずつ始めました。日曜日には仲の良い友だちと、3人を連れて、近くの川に魚釣りに行ったりし、信雄君を戸外に連れ出して、学級の仲間とのつながりが切れないようにしました。

2学期に入り、遠足や写生大会など、学校の話しながら登校刺激を始めました。両親も児童相談所に行かれ、そこで彼は体験活動(陶芸教室)に週1回参加するようになりました。2学期も半ばを過ぎたころ、毎朝、迎えに行ってくれた生徒が明日、信雄君と一緒に登校するつもりですと教えてくれました。帰りに立ち寄り、「先生、信雄が学校に行く準備をしています」とお母さんがうれしそうに話されました。

しかし、次の朝、信雄君は、自分の部屋に閉じこもり、ドア越しに話しかけると怒鳴り声で「学校には行かん」「帰れ」「ドアに物を投げつけてきました。今日をのびたらいけないと思い、お父さんと一緒に信雄君の部屋に入りました。彼は、しばらくづつまって泣き続けました。お父さんと私は、「今日学校に行かんから、二度と行かん」「それでいいとかい？」と言葉をかけた。教室に入れんなら、図書室に行ってみるだけでいい」と話すと、黙ってつなずきました。私は彼を車に乗せ、学校へ向かいました。信雄君は車の中で、近づいてくる学校をしっかりと見つめていました。

その後、信雄君は登校を始め、無事に卒業を迎えました。子どもたちの中にはさまざまな原因により登校できない状況に陥ることがあります。しかし、不登校になる子は、その前に必ず、SOSを発して助けを求めています。

子どもの毎日の様子をしっかりと見つめ、家庭・学校・地域で少しの変化にも気づき、誰かが声をかけることも、不登校に限らず、子どもの成長にとって大事なことでないでしょうか。

数日後、訪ねてみると、信雄君に会うことができ、放課後に家庭訪問をすることを伝え、1か月ほどは彼の好きな将棋やキャッチボールをして一緒に遊びました。信雄君との信頼関係が深まったころから、漢字や計算の勉強も少しずつ始めました。日曜日には仲の良い友だちと、3人を連れて、近くの川に魚釣りに行ったりし、信雄君を戸外に連れ出して、学級の仲間とのつながりが切れないようにしました。

2学期に入り、遠足や写生大会など、学校の話しながら登校刺激を始めました。両親も児童相談所に行かれ、そこで彼は体験活動(陶芸教室)に週1回参加するようになりました。2学期も半ばを過ぎたころ、毎朝、迎えに行ってくれた生徒が明日、信雄君と一緒に登校するつもりですと教えてくれました。帰りに立ち寄り、「先生、信雄が学校に行く準備をしています」とお母さんがうれしそうに話されました。

しかし、次の朝、信雄君は、自分の部屋に閉じこもり、ドア越しに話しかけると怒鳴り声で「学校には行かん」「帰れ」「ドアに物を投げつけてきました。今日をのびたらいけないと思い、お父さんと一緒に信雄君の部屋に入りました。彼は、しばらくづつまって泣き続けました。お父さんと私は、「今日学校に行かんから、二度と行かん」「それでいいとかい？」と言葉をかけた。教室に入れんなら、図書室に行ってみるだけでいい」と話すと、黙ってつなずきました。私は彼を車に乗せ、学校へ向かいました。信雄君は車の中で、近づいてくる学校をしっかりと見つめていました。

その後、信雄君は登校を始め、無事に卒業を迎えました。子どもたちの中にはさまざまな原因により登校できない状況に陥ることがあります。しかし、不登校になる子は、その前に必ず、SOSを発して助けを求めています。

子どもの毎日の様子をしっかりと見つめ、家庭・学校・地域で少しの変化にも気づき、誰かが声をかけることも、不登校に限らず、子どもの成長にとって大事なことでないでしょうか。

## 地名の歴史

## 歴史の変遷と地名

332

### 矢嶋姉妹周辺

七郎の酒乱説は矢嶋榎子の聞書である守屋東著「矢嶋榎子」それを下敷きにした蘆花の「竹崎順子」では刃物の記述はなく、久布白才子編「矢嶋榎子伝」には(些細なこと)で刀を抜く…と述べられたが…とあるが、3冊共に手裏剣を放つ記述はない。ただ、三浦綾子著「われ弱ければ・矢嶋榎子伝」には、手裏剣の記述があり、著書により内容が一致しない。結局、榎子の述べた内容をどの時点で記録したかの差であるつかとも考えられます。

で、酒癖はあっても七郎の人格には多少は考慮する必要があります。あつたのではないかと思えます。「矢嶋榎子」「竹崎順子」を底本とする、それ以後の矢嶋榎子伝の著者は、一度も林家への裏付調査がないことが不思議です。「われ弱ければ・矢嶋榎子伝」著者三浦綾子氏に子孫の一人が「手裏剣説」は誤りだと抗議したのに対して、「定説だ」とつめた返事だったと聞きます。「矢嶋榎子」が出版された大正12年には七郎はすでに故人明治32年1月逝去)であり、反論の仕様もなく、榎子の話が定着し、七郎酒乱説が定説化していきます。七郎と榎子の社会的立場の差です。

### 益城町文化財を訪ねる会

会長 松野國策



著書「竹崎順子」

益城町教育委員会